

「県民と県議会との意見交換会」 一戸会場 の概要

〔日 時〕 平成31年4月23日(火)14:00～16:00

〔場 所〕 御所野縄文博物館 会議室

〔テーマ〕 縄文遺跡群をはじめとする県北地域の文化振興について

〔参加者〕 (8名)

山 井 真 帆(二戸演劇協会「The 雲人」)

佐 藤 貴 之(九戸政実武将隊 隊長)

工 藤 敬 一(山内神楽 会長(軽米町郷土芸能保存会会長))

小井田 重 雄(江刺家神楽 会長(伊保内高校郷土芸能委員会指導者))

鈴 木 雪 野(御所野縄文博物館 学芸員)

澤 口 亜 希(根反鹿踊り)

野 里 重 一(高屋敷神楽(一戸の山伏神楽))

中 村 緑(特定非営利活動法人いちのへ文化・芸術NPO)

〔出席議員〕 (8名)

工藤誠議員、千葉進議員、佐藤ケイ子議員、阿部盛重議員、高橋孝眞議員、川村伸浩議員、
千葉絢子議員、小西和子議員

〔オブザーバー議員〕 なし

〔事務局職員〕 (8名)

◆ 参加者自己紹介及び現在の活動状況の紹介

○山井さん

二戸演劇協会「The 雲人」に所属し、二戸市民文士劇に参加している。演劇活動は、高校生の時に演劇部に所属していたことから始まり、今も継続し活動している。今所属している「The 雲人」には、入団して9年目になる。二戸演劇協会は、大人のグループでできている「The 雲人」と、小中高生のグループでできている「あいキッズ」という子供グループの2つのグループに分かれている。1年に1回定期公演をしたり、朗読劇をしたり、合唱祭、イベント活動などにも参加している。

二戸市民文士劇は、今度6回目の公演をすることになる。私は1回目から参加し、1年に1回公演活動を行っている。本日の意見交換会には、二戸市民文士劇に協力参加してくださった団体の皆さんもいらっしゃる。今回、この2団体とも、今年度の公演演目も決まり、活動がスタートした。これから、脚本、キャスト、スタッフの募集、作品作りに取り掛かっていくところである。

本日は、意見交換会を通して、県北広域で活動を行っている皆さんとお話をして、お互いの現状を知る良い機会となればと思っている。

○佐藤さん

九戸政実武将隊の隊長をさせていただいており、この活動を始めて5年ほど経つ。九戸政実武将隊は、山井さんが所属している二戸市民文士劇から派生したようなイメージである。

活動内容としては、殺陣というアクションを週1回集まって練習し、地域の祭や色々なイベントに招いていただいてパフォーマンスをするという活動を主に行っている。構成メンバーは、全体では30人弱であるが、年齢、性別、体力も様々である。体力に自信がない人はおもてなし班に所属し、実働できるパフォーマンス部隊と2系統に分かれている。パフォーマンス部隊が10数人おり、毎週

練習をしている。

敷居を高くしているつもりはないが、甲冑を着て、剣を振り回しているのも、やっていることが特殊なことから、我々のところだけではないと思うが、興味があっても人材が集まらないのが課題である。下は高校2年生から上は自分の上に49歳までおり、今度の連休中もパフォーマンスの依頼があり、出演する予定となっている。

本日は、皆さんと色々な問題を共有できればと思っている。

○工藤さん

山内神楽の会長として活動しているが、皆さんは知らない方も多いと思う。

現在の活動内容は、小学校と中学校に毎年参加募集を行い、勝手連的に好きな人が集まって活動を続けている。今年度は、小学生が18名、中学生が3名、高校生が3名、大人の会員が14名で活動している。伝承活動ということで、年間通して毎週2回、練習を行っている。小学校の総合学習の中で、4年生に20年以上指導を行っている。晴山小学校に統合され今は無くなった山内小学校で活動を行ってきた。

子供たちを指導する活動を通じて感じているのが、見てもらう場所がないということである。子供たちの活動の成果を発表する機会を提供し、活動を継続していきたいと考えている。

軽米町郷土芸能保存会会長も仰せつかっているが、軽米町には9団体あったが、過疎化と学校統合によって、伝承活動を余儀なく中止してしまい、今、5団体となった。これから、どのように活動していくか、行政と相談はしているが難しい問題である。何とか工夫して活動を続けていければと思っている。

今日の意見交換会が、少しでも活動を継続させることに生かしていければと思う。

○小井田さん

江刺家神楽保存会会長と伊保内高校の郷土芸能委員会の指導者として16年程になる。

小学生、中学生、高校生の指導をしながら、保存会活動を行っている。我が家では、「神楽が仕事で、農業が趣味だ」と言われている。

江刺家神楽を知らない方がいると思うので、説明させていただく。有名な早池峰神楽、黒森神楽は国の指定になっている。普代村の鶴鳥神楽などは、山伏神楽の流れである。岩手県の山伏神楽の流れは3系統あり、一関市と奥州市水沢地方の南部神楽は形が違う。山伏神楽の中でも江刺家神楽は一つの本流だと言われている。江刺家神楽と一戸町の中山神楽が県北地域と青森県の県南に伝わったものと言われている。私たちが分かっているだけでも472年前から伝わっているので、500年以上前から伝わっており、歴史的に古いものである。県北は上手にアピールができなかったり、人口が少なくなったりしたため、昭和50年代、私が20代の頃に一旦なくなった。たまたま先輩が中学校で3年ほど神楽に取り組んでおり、そういう人が何人かいて、まちなに残って伝統を残していかなければならないとして、再復興させたものである。

当時は、神楽は大夫がおり、神楽をする人で構成していたが、大夫が亡くなり、後継者がいないということで、何とか残す方法がないかと保存会を昭和58年に設立し、始めたものである。

現在は、小学生、中学生、高校生を指導しながら、26ほどあった演目を10いくつまで復活させた。ビデオや映像が残っていたので、それを見ながら、若手が少しずつ復活をさせており、今9演目も復活させた。ここまでするのに大変であった。

普段の活動は、自分たちは仕事をしながら、小学生、中学生、高校生の指導のため、夜に集まって、週2回ほど練習している。知名度を上げたいとの思いから、出演依頼があれば披露することを細々と続けている。

九戸村には、郷土芸能がたくさんある。神楽に限らず、鹿踊りや色々な踊りがあるが、どこも存

続の危機に瀕している。この要因として、子供の減少という実態があるが、現在、小学校の再編計画があり、小中一貫校として進めたいという計画がある。半面、それでは地域が廃れるとも言われている。

郷土芸能という地域の文化を残すためには、学校を減らすのはまずいと考えている。児童・生徒が少人数になって、一人、二人になってしまえばどうしようもないが、ある程度的人数が確保できるのであれば、地元の小学校を残しながら、地域で存続させる手立てがなければ、神楽が無くなるのではないかと感じている。若者が、神楽が好きだと言って、地元で郷土芸能委員会を作ったので、地元で仕事を持ちながら、続けている若者も増えてきている。何とかこの芽を育てていって欲しいと思い活動している。

○鈴木さん

御所野縄文博物館は、一戸町の役場職員のほかに、いちのへ文化・芸術NPOという団体が一部業務委託を受けており、私はNPOの職員の一人である。

仕事の内容としては、博物館に来館するお客様の受付や案内のほかに、学芸員でもあるので、保管されている資料の管理などを行っている。このほか、ボランティアの事務局を行っている。御所野遺跡には、ボランティア団体が3つ所属している。1つが「御所野遺跡を支える会」という、主に、お客様のガイドを請け負う団体である。もう1つが「自然と歴史の会」という、一戸町の自然や歴史、文化について調査・研究を行っている団体である。そして、もう1つは、「御所野発掘友の会」という、町内の発掘調査に携わっていた、主に女性で組織されている団体である。現在は、公園の史跡の草取り、掃除、イベントの際の食事作りなどを請け負っていただいている。

現在の課題として、特にガイドを請け負っている「御所野遺跡を支える会」の会員の皆さんが、高齢化に伴って、徐々に減少していることである。世界遺産登録を控えて、色々な整備を進めており、お客様も徐々に増えつつあるので、今後、ガイドをもっと増やしていきたいと考えている。

平成29年度に、支える会をさらに支えていただきガイドをして欲しいと考え、「御所野遺跡ガイドサポーターズ」という名前を、町内在住の若手の方を中心に募集をかけた。現在は15人ほど所属している。その中の最年少は、現在高校1年生で、二戸市民文士劇に所属している。

一戸南小学校は御所野遺跡を学区内に含んでおり、3年生から6年生までの児童が「御所野愛護少年団」を組織している。6年生になると子供ガイドとして、希望があったお客様を案内できるように勉強している。子供ガイドの皆さんは、非常に熱心に何度も御所野遺跡にきて、色々な調査し、ガイドを積極的に頑張っている。そういった子供ガイドが中学校や高等学校に進んでからも御所野遺跡に興味を持ち続けてもらい、中学生、高校生となると色々な忙しくなっていると思うが、またガイドに来てもらえるよう、現在その仕組みづくりを行っている。

もう一つの課題は、多言語化に対応しきれていないことである。昨年からは、ガイドの方を中心に、英語で御所野遺跡を案内できるように、英語ガイド講座を開催した。ボランティアに英語が堪能な方がいるので、その方を講師にお願いし、町内のALT（外国語指導助手）の方にも協力をお願いして、英語の勉強会を行っている。主に、二戸市や一戸町の方が参加しており、今後も続けていくこととしている。

また、台湾からのお客様が昨年くらいから増えつつあるので、中国語のガイドも対応できるように、今年から中国語ガイド講座をスタートさせる予定で準備を進めている。

いろいろと課題を抱えているが、世界遺産登録に向けて準備を進めている。

○澤口さん

根反鹿踊りは、御所野遺跡がある岩館地区の隣の根反地区に、約400年前から伝承されている鹿踊りである。昭和40年代に保存会を発足し、当時は、根反地区の住民だけで伝承活動を行っていた。

小さい地区で、徐々に人数が減り、根反地区だけでは伝承活動を続けることが難しくなり、平成6年に地元の一戸南小学校で根反鹿踊り伝承クラブを発足し、保存会の会員が指導を行いながら、後継者の育成を行っている。そういう活動が認められ、平成8年に、当時では県北地区初となる岩手県無形民俗文化財に指定された。現在保存会には、中学生から70代までの幅広い世代が在籍している。保存会員としては30人ほどいるが、実際に活動に参加できるのは、その中でも20人いるかいないかであり、10人に満たない場合もある。毎週土曜日に、根反地区の公民館を利用して練習を行っている。小学校の伝承クラブでは上手く踊れない児童が、自発的に保存会の練習に参加している状況である。

活動しながら一番感じているのは、どこの郷土芸能団体も同じであると思うが、後継者不足である。子供の絶対数が足りないのは勿論であるが、子供たちを取り巻く環境が大きいと感じている。昔に比べると子供たちの活動する場が広がり、それは良いことであると思うが、その活動の一つ一つが浅く広く繋がってしまい、子供たちは郷土芸能活動よりも、スポーツなど目立つほうに引っ張られているところがあると思う。郷土芸能のほかにスポーツをやっていると、両方の活動が重なった場合にスポーツのほうに行ってしまうので、上手く両立させることが難しいと日々感じている。

保存会では、中学生や高校生が主に活動しており、学校活動という面もあることから参加しやすいが、大学生や社会人となった場合に、二戸地区は人口が流出してしまい、所属している団体から離れざるを得ないという状況になっている。勿論、私たち保存会員が郷土芸能の魅力を伝えるということが前提ではあるが、少子化や人口流出を食い止めるという面では、皆さんと協力しながら解決していかなければならないと感じている。

また、先ほど、山内神楽さんや江刺家神楽さんから話があったとおり、県南地区に比べると県北地区は知名度が低いこともある。私たちは根反鹿踊りを伝承しているという自負を持って活動をしているが、鹿踊りという花巻市や遠野市が有名なため、県北地方は周知の面でも皆さんに協力していただくと良いと思っている。

本日は、こういった場にお招きいただいたので、皆さんの御意見を聞きながら、今後の活動の参考にしたいと考えている。

○野里さん

高屋敷神楽は、小鳥谷地区の奥州街道沿いにある、現在37軒の世帯で100人が住む村である。平成24年には、コミュニティ100選に選ばれ、達増知事が草の根地域のホームを訪れていただいたところである。

高屋敷神楽会のメンバーは、上が64歳、下が小学校5年生で、現在15人で伝承活動を行っている。高屋敷神楽の由来としては、源流は江戸時代中期に存在していた上女鹿沢というところの三名院に伝わったと考えられている。江戸時代後期には、三名院の力が衰え、神楽を率いて村々を周ることができなくなってしまい、神楽は三名院を離れ、私たちの集落に神楽を伝えたことが高屋敷神楽の始まりだと伝わっている。

平成24年には、これまでの活動が認められ、岩手県指定無形文化財に一戸町の山伏神楽、高屋敷保存会として認められた。

年間の活動行事は、1月2日の村での祈祷、小鳥谷保育所等での小正月行事への参加、5月の国指定天然記念物藤島口で行われる藤まつりへの参加、6月は国の文化財の旧朴館家で行われる神楽公開で演じている。8月は一戸祭りの中日に行われる権現舞パレードへ参加、9月は小鳥谷八幡宮の例大祭、11月は一戸町郷土芸能祭に参加する。その他、各方面から参加要請があればその都度出演している。今年6月には、沖縄で行われる第1回宮古島国際文化交流フェスティバル2019、世界無形文化財の祭典に出演する予定である。（※宮古島国際文化交流フェスティバル2019は主催者都合により開催中止）

○中村さん

いちのへ文化・芸術NPOの一戸町立図書館部門の統括を担当している。当NPOは文化振興を理念とし、ドーム型の施設の中に、一戸町コミュニティセンターと一戸町立図書館が入っており、その指定管理者を当NPOが担っている。御所野縄文博物館の指定管理も一部担っている。

生涯学習や地域文化の発展についての図書館としての役割としては、町民の暮らしに役立つ資料や情報の提供に力を入れている。特に、一戸町の医療福祉、子育て支援、まちづくり分野に重点を置き、地域おこし事業や親子 de サイエンス図書館等、実施している。一戸町コミュニティセンターで毎月1回開催している「認知症カフェ」での図書配本等、団体への対応協力も行っている。

御所野遺跡の世界遺産登録に向けて、図書館の中に世界各地にある世界遺産を紹介した本のコーナーを設置したり、お客様の目に触れるカウンターに御所野遺跡の本のコーナーを設置したりし、機運を高めている。

また、御所野遺跡を訪問する前に図書館に立ち寄って、御所野遺跡はどういうところか、御所野遺跡にはどう行くかなどの質問がある。私たちも一戸町の間人として、御所野遺跡を調べておかなければならないと感じて、職員研修で御所野縄文博物館の高田館長を講師に招き、勉強会をしている。

一戸町の小・中学校の学校図書館に支援を行っているが、一戸小学校の学校図書館の中に学校司書がおり、御所野遺跡コーナーを昨年初めて設置している。6年生が修学旅行に行くが、御所野遺跡のPR大使に任命されており、仙台に行った時にPRする活動を行っている。図書館に御所野遺跡のパンフレットを置き、縄文土器などを御所野縄文博物館から借りて展示するなど、事前学習に役立てている。

御所野遺跡の世界遺産登録、神楽の無形文化遺産の保存について、皆さんの御意見を伺って、図書館として何ができるのか考えていきたいと思う。

◆ 意見交換

○小西和子議員

私は小学校の教員であったことから、伝統芸能活動を伝承していくために、学校は大きな役割を果たしてきたのではないかと捉えている。学校を統合することによって、それぞれの学校で伝承してきた郷土芸能が、例えば3校が統合すれば3つ一緒になる。それをどのようにして伝承していったらいいのか、学校の教職員は悩んでいる。たいてい、保存会の方々にお願いをしている形になってきていると感じている。統合したことによる弊害についてと、統合してもこのように上手く伝承しているといったところをお聞きしたい。

〔回答：小井田さん〕

九戸村は現在小学校5校、中学校1校、高等学校1校がある。今、5つの小学校を1つに統合する方向性が九戸村から示されている。心配される要因とすれば、それぞれの学校で取り組んでいる様々な地域の郷土芸能がどのようになるのかという不安があると思う。何とか残して欲しいと、どこの地域でも思っている。そういう再編に向けた説明は、九戸村からはなく、どうあれば良いかという提言もない。

そういう状況になった場合にどうすれば良いかというのは、先に一緒になった山内神楽さんが取り組まれている。私の意見とすれば、本当に統合をしなければならないのであればそれはやむを得ないが、住民参加型での統合でなければ、間違った方向に行くのではないかと心配している。

〔回答：工藤さん〕

山内小学校、観音林小学校、晴高小学校の3校が統合して、晴山小学校となった。地域に残っている伝統芸能と言えば、山内小学校は山内神楽、観音林小学校は力太鼓、そして晴高小学校にはえんぶりがあった。そして現在、何とか活動しているのは山内神楽と力太鼓で、えんぶりは活動できなくなった。

統合して感じたのは、「山内神楽となれば山内地区の人がやる」という感覚がどうしてもあり、それも当然という意識である。統合してから、毎年、学校を通して会員募集のチラシを配り、参加してもらっているが、今年は、地区外からも3人の子供たちが参加してくれている。諦めないで声をかけて、来てくれる子供を大事にしたい。1年目はゼロ、2年目は1人、今年は4人となったので、無駄ではなかったと思っている。ただ、指導する場所がないことも問題である。私はたまたま神社を持っており、30年前から指導してきた。神社のことも知ってもらって、色々話をしながら子供たちと遊び、活動をしている。子供たちの人数が減っていることから、色々な取り組みをしていかなければならない。今年小学校の運動会の中で、山内神楽と力太鼓を披露したいと先生から相談があり、何とか実現したいので、取り組んでいくこととしている。大変であると思うが、何もしなければ活動が継続しないので、工夫してやっていければと思っている。

○千葉絢子議員

神楽と鹿踊りの方にお聞きしたい。

ただいま、工藤さんから神社の参集殿で練習をしているとのことであったが、音がでる伝統芸能の場合、どこで練習をするのか。時間帯も大人の場合は仕事が終わってからとなると夜間の19時頃から21時くらいまでとなってしまう、練習する時の音の問題がでてくると思う。

実は、うちの団体も近くに練習場所を持っていたが、移転しなければならなくなり、新しい練習場所をどうするかという問題が生じ困っている。練習場所をどのように確保しているのか。

また、伝統芸能の場合に装束を作る方、担い手が減ってきており、新しい方が始める場合、また、装束や楽器などの修復にもお困りではないかというところをお伺いしたい。

先ほど、地域の方で傳承していくのが当たり前という考えが根付いていたけれども、地域外の方も入ってきてくれたとの話があったが、メインのところは地元の方で、外から来た方には神髓を教えないなど、婿には教えないなどと言っている父親がいたり、せっかく傳承活動をしてきても、上手く繋がっていかないという話もある団体から聞いたことがある。新しい方の受け入れについて、地域でどのようにフォローしているのか伺いたい。

それから、400年を超える歴史のある団体もあるとお聞きしたが、資料や映像の記録の保存のあり方で、図書館との連携が非常に大事になってくると思うが、その考え方や図書館の考え方もお伺いしたい。

〔回答：澤口さん〕

練習環境については、廃校になった根反小学校を公民館として活用している。周りにほとんど民家がなく、騒音については問題ない。練習時間については、社会人もいるため、毎週土曜日の夜7時半から8時半まで行っている。

60年前の小学校なので、老朽化がかなり進んでおり、ここ4～5年でトイレは新設したが、練習場にしている講堂に穴が空いたり、傾きがあるので、踊っている拍子に転んでしまったり、床が抜けるのではないかという心配がある。以前、役場に相談したところ、他に郷土芸能を傳承するための講堂を造ったので、そこで活動をしたらいいのではとの話があった。しかし、その講堂の場所は別の地区になってしまう。私達としては、根反地区で行っているからこそ根反鹿踊だと思っている。地区を離れて活動してしまうことは、あまり良くないと考えている。活動しているメンバーの中に

も、根反地区のメンバーが2名しかいない。それだけでも、根反の名前を借りている状況なのに、さらに地元を離れて活動することを私達は望まないで、根反地区の古い校舎を使いながら活動をしている。

装束や楽器の修理についてだが、私達の団体は結構人数がいるが、一人ひとり役割が異なり、「鹿」いわゆる鹿の頭を被る役割と、その他に「太刀振り」という刀を持って踊る役割もある。また、「ささらすり」という竹と木の棒で作ったささらというものをすり合わせて音を出す役割もある。

着物に関しては買っているが、鹿の頭やささらの竹や木の棒は自分達で作っている。ただ、今まで制作を行っていた前会長が3～4年前に急死し、道具作りが中断している。材料の調達はあるが、具体的な作り方になると資料としても残していない。口伝えでは聞いていたことはあるため、それを参考にして作っていくか、頭については地元の大工さんをお願いして作ってもらっていた経緯から、根反地区にいる昔の大工さんの中に作り方を知っている方もいるかもしれないので、地域住民と協力しながら、道具を制作することは可能だと考えている。ただ、今後のことを考えれば、自分達で資料としてまとめておいたほうが良いと考えている。

他の地域からの受け入れについてだが、小学校の伝承クラブ発足の背景には、根反地区だけでは後継者不足という問題があったことから、他の地域の子供も通学する小学校で発足した経緯があり、初めから他の地域の受け入れ態勢ができていた状況にあったと思う。実際、私も根反地区の出身ではなく他の地区の出身で、小学校の伝承クラブに入って、現在、保存会で活動している。

主に一戸南小学校で伝承クラブに入っていた子供達が保存会に所属して活動している状況だが、中には県外から太鼓を叩いてみたいとか、踊ってみたいなどのお話をいただいたこともあった。そういう場合は、実際に保存会で練習している場に来ていただいて、太鼓の叩き方なども実際に教えたりしている。その方はもう保存会の練習には来ていないが、他の地区からの受け入れについては、入り口はどんな形であれ、基本的なことを守り伝承されるのであれば、私はいいと思う。

【回答：中村さん】

私達の図書館は16年目の比較的新しい図書館で、実は文化財の資料が余り残っていなかった。ただ、一戸町の教育委員会の文化財担当や御所野縄文博物館には郷土芸能の資料としてビデオテープは何本か残っていて、デジタル化して保存用としている。

図書館としても、デジタル化したものを一般のお客様にも貸し出しをしたいと考えているので、皆さんと協力をし、著作権の問題をクリアしたうえで、保存、情報提供につなげていきたいと思っている。

○千葉絢子議員

文化財資料については、資料が残っているかどうか重要なポイントになると伺ったことがある。

先ほど、九つの演目を受け継いでいるとの団体もあったが、実際はもっとたくさんの演目があったのではないと思う。他に宴会のときに披露するような砕けた演目もあったはずで、ただ、それらが失われていってしまって久しくて、一度失われると再興できなくなる。知的財産というか実際に踊っている映像、装束の資料の活用、保存についても考えていかなければいけないと思った。

ぜひ一般の方にも貸し出しをし、興味をもってもらえるような対応を町にもしていただきたい。

【回答：中村さん】

神楽に限らず、DVDを見たいというお客様が結構いる。子供が自由研究で神楽について調べたいということも結構あるが、大人向けの資料が多く、子供が調べるのが難しいとのこともあるので、子供向けの資料があればいいと思う。

○千葉進議員

三つほどお伺いするが、まず一つ目に、九戸政実武将隊の伝承についてだが、甲冑などはどのように準備したのか。

更に、資料を見ると、プロレスラーの藤波さんが名誉隊長をしているとのことだが、この地域に来たということなのか、または豊臣秀吉に対抗するために大阪まで行ったのか、この地域にどのように影響されているのかお伺いしたい。

二つ目に山内神楽について軽米ということでお聞きしたいのだが、中高一貫の軽米高校があるが、先ほど小学校の話があったが、中高一貫に伴って、伝統芸能が活かされているのか、高校生にどのように教えることで、子供達に伝承しているのか教えていただきたい。

三つ目については、一戸高校は文化祭の時に創作ダンスをやっていると思うが、そういう若い人達がまちにどのような影響を与えているのかお伺いする。

〔回答：佐藤さん〕

九戸政実武将隊は甲冑を身に着けてパフォーマンスをしているが、すべて私が軟質プラスチックを使って作っている。Facebook の九戸政実武将隊で調べると確認してもらえる。日本にいくつかある武将隊の皆さんは、過去の資料を調べて忠実に再現しているが、幸運なことに九戸政実に関しては資料がないので、それを逆手にとって、九戸政実はこの甲冑を着ていたであろうという設定を作った。

私は作るのが好きで、自分で作ったものなので、壊れても修繕に問題はない。ただ、伝統文化として続くものであれば、自分がいなくなると困る部分もあると思う。

藤波さんについては、とても城や歴史が好きということで、3年ほど前に毎年開催されている九戸城祭りのメインゲストとして来ていただき、この時の御縁で名誉隊長になったいただいた経緯がある。昨年度も来ていただき、3年連続で交流がある。リングで甲冑を着ていたのは、名誉隊長になったというパフォーマンスだったのだと思う。

〔回答：工藤さん〕

以前、小学生に指導したいと思い役場に連絡はしたことはあるが、まだ動きはない。高校生に対しては、何も取り組みはなく、具体的に活動はしていない。ただ、踊っていた子供達は祭りのときなどに声をかけると参加してくれる。

〔回答：鈴木さん〕

一戸高校で「華一」という踊りがある。これは、一戸町に御所野遺跡があることから、縄文をテーマにした踊りで、さらに郷土芸能の要素を取り入れている。毎年、御所野遺跡に一戸高校の全校生徒が来て、クラス対抗で踊りを披露しているが、それに正規の「華一」のメンバーも加わって踊っている。

また、御所野遺跡主催でフォーラムを毎年行っているが、昨年も二戸市民文化会館で開催した際に前座を飾ってもらった。衣装も白や紫を基調とした綺麗なもので、見た目もとても華やかである。この踊りを見ていただいて、御所野遺跡はいいと思っている方もいるのではないかと思います。

今後も、御所野遺跡に関わる活動の一つとして続けていきたいと思っている。

〔回答：小井田さん〕

学校との連携についてだが、九戸村では、神楽に関しては小中高繋がって指導している。高校は今から16年前、中学校は今から7年前、小学校は平成6年から取り組んでいる。きっかけは、以前、九戸村に就任した先生が、伝統芸能に興味がある先生だったため、運動会で発表したらしいの

ではないかと提案してくれたためである。

九戸村が学校単位で取り組むことができたのは、先生の影響の他、保護者をはじめとする地域の方の支えがあったからだと思う。特に、郷土芸能を残していくには、教育の力はとても大切だと思う。

○佐藤ケイ子議員

PRのことだが、先ほど知名度不足があるというお話があった。これは各市町村の取り組みの他、それを後押しする県のやる気も大事だと思うが、定期的な発表の場をどうやって確保しているのか。

また、宮古島にも行って、大会に参加するとのお話もあったが、資金面の課題もあると思う。県や市町村の補助に望むことがあるか。北上翔南高校は毎年、全国高等学校総合文化祭に出場するが、発表会で寄付を募って支援している現状もある。皆さんは、どのように財源を確保して、知名度不足を解消する取り組みをしているのか、また県がどのような補助をすればよいのか伺いたい。

〔回答：野里さん〕

宮古島に行くことに関しては、あまり条件はよくなかった。ただ、知名度を上げるためにはいいかと思い、参加することにした。交通費のみ主催者から出る。(※宮古島国際文化交流フェスティバル 2019 は主催者都合により開催中止)

〔回答：澤口さん〕

根反鹿踊りは県南に比べると知名度は低いかもしれないが、踊りの動きが大きくて、華やかな踊りなので、目をかけてもらうことも多い。ただ、花巻市の鹿踊りなどを見ていると、100人で舞う百演舞などに取り組んでおり、大きな取り組みの中に加わっていければ、だんだん知名度が上がっていくのかもしれないと感じている。

自分達でできる取り組みとしてTwitterやFacebookなどのSNSの活用があるが、保存会でも、若い子がTwitterで発信しているので、そこで知っていただくことにより、他の鹿踊りとの横の繋がりが広がり、出演依頼をいただくこともある。

また、観客の方がYouTubeに上げてくれることもあるので、私達もYouTubeで見ることができることを宣伝するなど、少しずつ広めている。

私達が発表する場で一番大きいのが、毎年8月に開催される一戸祭りになるが、その他にも出演依頼があれば、その都度参加させてもらっている。二戸市民文士劇にも昨年呼んでいただき参加した。そういうところで、今まで郷土芸能を見たことがない方達から、郷土芸能はすごいということを広めていただいている。

今までは、郷土芸能の出し物だけという感じだったが、視野を広げて、色々な団体と手を組んでいけば、見ていただく機会も多くなるのかと思う。

あとは、民間業者の主催だが、今年3月10日に県内の8団体の鹿踊りの若手を集め、トークイベントを東京で開催した。私の団体でも若手が参加したため見に行ったが、たくさんの方が興味を持って見に来ていた。

主な活動場所とすれば、岩手県、東北になるが、意外と首都圏においても郷土芸能に興味を示す方も多いので、都会に情報発信することも大事だと思っている。

○工藤誠座長

今お話があった文士劇についてだが、首長さんなどたくさんの方や団体が参加して開催している趣旨についてお話いただきたい。

〔回答：山井さん〕

名前としては、「二戸市民文士劇」となっているが、市民というのは二戸広域というふうに捉えてやっていきたいと思っている。お芝居ではあるが、郷土芸能や太鼓の生演奏があったり、各市町村の首長に出演いただいたりして、お芝居という枠だけでなく、その土地に伝わる素晴らしい文化を発信していける場になればと考えている。

○高橋孝眞議員

発表の場が少ないとのことだったが、年間どの程度、発表されているのか。

北上の鬼剣舞の団体は十数団体あるが、40回前後発表の機会がある。中には、少しではあるが謝礼をもらって出演することもある。一回出演することによって、3万円から5万円をもらっているようだが、そういう部分はどうなっているのか。

もう1点だが、広報を見ると、1,200人ほど来場しているが、そういう方々を芸能のほうに導く仕組みがあれば、後継者不足を少しでも改善することができると思う。北上の鬼剣舞も、昔は部落でやっていくという気持ちがとても強かったが、今では、花巻など各地から集まってもらって踊っている状況である。もっと広げる仕組みを作らないと後継者がいなくなると思うがいかがか。

〔回答：小井田さん〕

私達の団体は年30回くらい出ている。先ほど、謝礼の話が出ていたが、生徒達を中心ということもあり、私達は謝礼は10回ももらっていない。

定期的な発表の場がないということもあり、5年前から地元の3団体と他地域の違う系統の団体と共同で発表会を開くことも始めたが、入場料が無料なので、全額村からの40万円の補助金でやり繰りしている。現状は苦しく、先細り状態だが、見てくれる方も増えているので、興味を持っていただいていると思う。

また、それが縁で沿岸の神楽と人的交流を今年から始めた。江刺家神楽は、370戸の江刺家の人たちが中心だったが、その戸数だけでは限界がある。しかし、高校も他市町村から来ているので、そういう意味では後継者の芽が少し出てきているのかと思う。ほとんどの方は高校を卒業すると地元を離れるが、何人かは地元に戻ってきて続けている。今、20～30代が10人くらいいるので、なんとか残せると思っている。

お金の面ではかなりひっ迫している。

〔回答：工藤さん〕

謝礼は沢山もらえないのが現状である。正直なところ、大人10人、子供10人で2万円もらっても、子供にジュースを買えばなくなってしまう。色々な補助事業を取り入れてやっているが、謝礼だけだと運営は厳しい。2～30人の団体で30万円あったとしても、その中で衣装や交通費まで賄いきれない。

私の団体は地域の方々から支援してもらっているが、謝礼だけだと各団体運営は無理だと思う。そういう活動をしている団体への役場からの補助もあるが、今もらっている補助の10倍をもらわないとやっていけないのが本音である。伝統芸能を残していくには、団体まかせにするのではなく、行政でもバックアップしていく体制を整えてほしい。

また、発表する場も、従前の祭りだけでなく、新たな場を企画していかないと後継者は育たないと思う。今、九戸地方で郷土芸能発表会を市町村持ち回りでやっているが、正直なところ、来てくれる人が少ないと感じている。発想を変えて、二戸地域の発表を県南でやるとか、大胆な発想が必要だと思う。

〔回答：佐藤さん〕

我々は振興局にバックアップしてもらっているため、イベントに参加した際、謝礼金をもらえない。会場に行き、汗だくでパフォーマンスをして、数百円しかもらえない。だとするとバックアップがないほうがいいのかもわからない。自分達のパフォーマンスに見合った金額をもらう契約が我々にはできないという問題がある。

そういうことから、今、県からの補助を切り離してみようかと検討しているが、それが良いのか悪いのか分からない。我々は10人で行っても、弁当がないこともある。歓声や拍手はもちろん嬉しいが、なかなかモチベーションが上がらない。私の高校生の息子もパフォーマンスをやっているが、レスポンスがなく、かわいそうだと思うこともある。

○高橋孝眞議員

子供達が参加すると、少しでもお小遣いがもらえたら嬉しいのではないかと。それが嬉しくて練習に来てくれるという話も保存会からある。私の神社では秋祭りをするが、鬼剣舞が来てくれることにより、会場に花を添えてもらえる。やはり、自分達が発表する場を作る仕組みを考えないといけないと思っている。

○千葉絢子議員

私が所属している伝統芸能団体は、民族芸能保存連絡協議会に加盟している人たちで講演を企画する。盛岡劇場やキャラホールなどで、子供達だけの発表会や大人も加わった発表会などを開催する場合、各団体にチケットのノルマを分担してもらうほか、入場料をいただいて開催することもある。

それから、釜石には各地域に虎舞というものがあり、復興も兼ねて虎舞フェスティバルに関わっているが、復興の関係なのか、国の予算が毎年ついている。それを元手に、毎年、同じ会場で開いていて、地域の方に来場してもらい、非常に入り込みも増えているが、それが沿岸だけでなく、県内全域が被災地という形で、文化庁や復興庁から交付になる事業費があるかもしれない。民俗芸能の保存や維持に関しての補助金メニューも何種類かあるが、それが使いづらいというイメージがあるのかもしれないが、補助制度を知っている団体が制度を活用しており、海外や県外などに行く際の補助金が得られるメニューもある。

ぜひ、県やお住まいの市町村などにお問い合わせいただきたい。もしかしたら、連絡協議会のようなものがなければ、なかなか情報を入手することが難しいと思うが、活用の足しになればと思う。

○阿部重盛議員

ボランティアについて先ほどお話があったが、文化ボランティアという表現が正しいかは別として、そういう機会によって後継者が育っていくきっかけになると思っているが、それを知らない方々もいると聞いている。枠を広げて他地域まで連携しているような考えや行動はされているのか伺いたい。

また、県のコーディネーターとの連携は具体的にどのようにされているのか伺いたい。

〔回答：鈴木さん〕

「御所野遺跡を支える会」に県からの助成金をいただいたことがあり、一度にたくさんの方が来た時に対応するための拡声器と、御所野遺跡を知ってもらうための子供向けの紙芝居を作る費用に充てた。その紙芝居は図書館や町内の小学校に配った。

また、ガイドするにあたって参考にしてもらうガイドマニュアルというものがあるが、昨年、御

所野縄文博物館の職員と共同で改訂し、その印刷代に充てた。

その他、町内の方に限らず、色々な方にボランティアをしていただければ助かると思っており、周知のお願いなども行っている。

○阿部重盛議員

このことについては、一戸町だけでなく全国のことだが、自分の生まれた地域の特徴や良さをどのように生かしていくかが大切である。

皆さんは伝統的なものや芸術的なものなど、色々なイベントをしているが、若い人を呼ぶという新しい発想も必要ではないかと思う。そういうやり方で移住が増え、地域が活発になったという話も聞く。ここに住んでいる方はもちろん、外からあえて若い人を呼ぶという企画、調整は行政も含めて必要になってくると思うが、どのように考えて今後進んでいくのか。

〔回答：鈴木さん〕

縄文時代という若い方で興味を持つ方も少なかったが、最近、縄文展というものが上野の東京国立博物館で行われ、これを見て来場したという方々もいた。

また、フリーペーパーで「縄文 ZINE」（「縄文」と「MAGAZINE」を組み合わせたもの）というものがあり、大変砕けた感じで縄文文化について紹介してもらった。最初は知っている方も少なかったが、徐々にフリーペーパーの存在も広がり、若い人に浸透していると実感している。

そして、一昨年に「縄文 ZINE」の編集長に協力してもらい、秋にここでイベントを行った。タレントの藤岡みなみさんに来てもらい、御所野縄文博物館の全体を使って、「縄文謎解きゲーム」を行った。若い人達をターゲットにした企画だったため、これまでのイベントに比べると若年層の方が多いように見受けられた。

これからも縄文の魅力を PR して、色々な年代の方に訴えていきたいと思う。そのために色々と情報を集めていきたい。

〔回答：二戸地域振興センター〕

県のコーディネーターとの連携については、二戸地域では二戸市民文化会館の館長に文化芸術の相談をお願いしている。

○川村伸浩議員

二戸市民文士劇について記事を拝見したが、2日間で1,200名ほど来場したとのことだが、私も花巻市で市民劇場をやっており、以前はそのくらい集まっていたが、最近は2日間で600名ほどである。出演スタッフも多いようだが、その辺りで工夫されていることがあれば伺いたい。

もう1点だが、伝統芸能での後継者不足について、地域の保育園や幼稚園の園児に伝統芸能を継承する取り組みがあれば教えていただきたい。

また、確かに後継者不足もあるが、一方、若い方が一生懸命神楽に取り組んでいて、他地域の団体のメンバーとの交流が盛んになっていると感じている。そういった取り組みがあるのか、または今後、そういう取り組みに興味があるか伺いたい。

〔回答：山井さん〕

一回目は目新しいので、沢山お客さんも集まるが、2年目、3年目と続けていくと人を集めるのは大変である。

市民文士劇に関しては1年目と2年目が同じ作品、2年目と3年目が同じ作品というふうに再演が続いてしまったことも原因の一つにあったため、5回目の公演は新作を上演した。また、郷土芸

能の皆様にゲストで出てもらったことも、アンケートでのお客様の反応がよかった。

さらに、劇の形態の一つとして、オーケストラピットを作って生演奏で演じたり、他にも時代劇を題材にしていることが多いので、九戸雅政実武将隊の佐藤さんにつけてもらった殺陣をしたり、劇の中でも色々な工夫を取り入れたりしながらやっている。

あとはPR活動で、SNSを発信したり、YouTubeで稽古風景を動画発信したりしている。

〔回答：野里さん〕

私の小鳥谷地区についてだが、保育所、小学校、中学校で神楽をやっている。その子供達が大きくなり、今の神楽を支えている。私達の神楽は鶴鳥神楽と繋がっており、去年の10月には「神楽の日」に呼ばれ、前日に現地に入り、飲みながら交流するといったような横の交流を広げている。

○川村伸浩議員

皆さんの抱えている課題も共通だと感じた。今後も、年1回でも横の連携をとることにより、お互いを盛り上げていったらよいのではと感じた。

○工藤誠座長

それでは時間になったので、意見交換は終了させていただく。カシオペア連邦の市町村の方々に集まってもらったが、御所野遺跡の世界遺産登録についてピックアップされ、非常に注目されているが、それ以外にも沢山の文化芸術活動、伝統芸能があると改めて感じた。

一方、後継者の問題、財源の問題などについては、関係団体が一緒になって、頑張っていないといけないし、また次の世代に残していかなければならないと思った。

今日は皆様から貴重な御意見をいただき、感謝申し上げます。冒頭にも申し上げたが、本日頂戴した御意見、御提言については、県議会の全議員で情報共有して、今後の議会活動に生かすので、これからも県議会への御意見や御提言があったら、地元の県議会議員、あるいは県議会事務局までお知らせいただきたい。

本日はお忙しいところ、御参加いただき、感謝申し上げます。

以上で、意見交換会を終了させていただく。